

## 台湾茶の歴史を訪ねる 第十二回



## (12) 鉄観音茶の歴史とは

須賀 努 (コラムニスト／茶旅人)

日本でも最も知られている中国茶、鉄観音茶の歴史を知りたいというご要望を受けた。鉄観音の故郷は中国福建省安溪であり、今もそこで茶が栽培されている。一方 19 世紀末に茶樹が台湾にも伝わったと言われており、台湾鉄観音茶も存在している。今回は兩岸の歴史を追い、合わせて福建から台湾への移民の歴史と茶にもスポットライトを当てたいと思っている。

## 安溪の思い出

福建省泉州市にある安溪県は、鉄観音茶の発祥地であり、現在も一大産地である。同時に東南アジアへ大量の華僑を輩出したところとしても知られている。今回の安溪訪問では華僑史研究の第一人者、陳克振先生 (87 歳) にお会いして、話を伺ったが、インドネシア、マレーシア、タイ、フィリピン、ミャンマーなど東南アジアへ渡った人々の中で、茶行を開いた者も多くいたということで、大変興味をそそられた。勿論台湾へも多くが渡って来たが、『台湾に渡った中国人は華僑とは呼ばない (中国では台湾への移民は国内移動とみなされ、華僑とは呼ばれない)』とのことで、先生の研



厦門 20 世紀最後の日に泊まった鷺江賓館の今

究範疇外という言葉をもらい、その複雑な兩岸関係に改めて思い至った。

筆者が初めて安溪へ行こうとしたのは、何と 20 世紀最後の日、2000 年 12 月 31 日だったから、鮮明に記憶に留めている。何もわからずに厦門で車をチャーターしたが、運転手も安溪、そして茶に詳しい訳でもなく、かなり手前の官橋という場所にあった大きな茶工場にフラッと入ってみた。そこが安溪国営茶廠だと言われ、驚いた。同時に『我々は民営化するんだ。これからは皆独自に商売する時代になるので、あなたがここのお茶を扱わないか』と当時の副社長から言われたことが印象的だった。因みにこの工場では日本の某社の茶飲料の原料茶葉も大量に輸出していたと聞いた。



安溪 華僑史研究家の陳克振氏

そう、日本では1980年代から烏龍茶ブームが起こり、その後鉄観音茶はその代表銘柄のように扱われてきた、という歴史があった。

因みにその翌日、21世紀の最初の日に台湾側の金門島から厦門に戦後初の直行船がやってくるというので、厦門の港が黒山の人だかりだったこともよく覚えている。これが1949年以降途絶えていた、小三通と呼ばれる正式な中台交流の始まりだった。こんな歴史的な日にこの場所に立っていたことは、今でも運命を感じざるを得ない。そして現在の活動はここから始まっているとも強く思う。

その後、香港でご縁が出来た茶商の中に、安溪出身の人々があり、いつかきちんと安溪に行きたいと思いながら、10年以上の月日が過ぎてしまった。ここ数年は毎年のように安溪に赴いたが、そこは大坪という場所であり、品種で言うと鉄観音より毛蟹発祥の地だった。

## 鉄観音茶の発祥と定義とは

ついに2017年、鉄観音茶発祥の地と言われる西坪に辿り着く。そこには2つの発祥の謂れがあり、母樹があり、2つの歴史が語られていると、地元の人から聞いた。1つは1720年頃、西坪鎮堯陽松岩村の魏蔭という観音信仰の厚い茶農が夢の中で観音からお告げがあり、岩の割れ目から茶樹を発見する。魏はこの茶樹を各地に広めたが、茶は鉄のように色が黒く、観音のお告げと相まって、鉄観音と名付けられた。

現在その発祥の地とされる場所へ案内されると、山登りするように高台に上がる。廟があり、風景が楽しめ、岩に文字が彫られていたが、如何にも観光用だと思われた。実際には道路の下をかなり下っていくと、そこに『魏蔭鉄観音発源地』と書かれた碑とほぼ枯れたような母樹を見ることが出来る。以前はこの魏説が主流だったと聞いている。



安溪西坪 南岩鉄観音母樹

もう一つは、王士讓という人が1736年に南山を歩いていて、他と異なる茶樹を発見し、持ち帰って育てたところ、この茶が素晴らしい香りを放ち、北京に行く際に宮廷に献上し、時の乾隆帝より『南岩鉄観音』と命名されたというもの。この話も歴史としてはどうかと思うものの、現在西坪の住人の殆どが王姓であることからか、こちらの説が有力視されている。

正直に言うと、そのどちらが正しいかなど、既に多くの研究も成されているようだが、実際のところ、後世の人間に判断できるはずもない。ただ18世紀ごろ、鉄観音という品種が生まれ、その葉を使って発酵茶が作られたという事実があるように思う。この発酵茶そのものの起源についても、武夷山と安溪で説が分かれるようだが、武夷山に行った時、『ここで茶を作っている人は閩南人が多い。何故ならこんな山の中に人が沢山住んでいた訳がないから、労働者として移住してきたのさ』という話しにかなり引っ張られている。

そもそも鉄観音茶とは何だろう。基本的には『鉄観音品種の茶葉で作られた半発酵茶』というのが、中国での定義になるだろう。勿論今や鉄観音はブランド茶となっており、残念ながら現実には鉄観音品種以外で作られた茶も多く含まれているようだが、定義上は明確だと言える。前述の

2000年に行った国営茶廠では、はっきりと鉄観音、本山、毛蟹、黄金桂という品種別商品を見ることができたが、最近ほとんど鉄観音で統一されてしまっているのは販売上の利便性重視（鉄観音ブランドが一般人に認知できる）の表れだろう。

台湾の鉄観音茶については、そもそも定義が異なる。中国の書籍にも『台湾鉄観音茶は鉄観音品種以外の茶葉を使って作る茶もある』と書かれており、これが大いに戸惑う原因になっている。安溪で聞く限り、『鉄観音茶といわゆる烏龍茶、作り方は同じだよ』というのだが、一方、台湾の木柵で聞けば『発酵と焙煎が違う』というのだ。ということは、台湾の場合、安溪とは製法も違い、場合によっては品種も違う茶葉で鉄観音茶が作られているのだろうか。台湾の定義は『鉄観音製法で作られている部分発酵茶』ということになる。大いに疑問が湧き、中台双方を旅する羽目になっていく。

## 木柵鉄観音の歴史

台湾鉄観音茶の発祥の地が木柵であることにはあまり異論はないようだ。1875年木柵で生まれた張迺妙が、1895年頃に原籍のある安溪大坪に旅して、12株の鉄観音茶樹を持ち帰って植えたこと、張迺妙茶師紀念館を運営する第3代張位宜氏（迺妙四男の末息子）は説明してくれる。この紀念館は現在観光地化が進んでいる猫空のロープウエー駅から歩いて10分ぐらい下ったところにあり、隣には長男の子供が六季香という茶莊を開いて、その伝統的な茶作りを継承しているという。

張迺妙は1921年設立の文山茶業株式会社に茶師として勤務する傍ら、総督府の命じる巡回教師として各地で講習会の講師などを務めていた。1919年頃、投資家の要請で再び安溪に行き、鉄観音1000株を持ち帰ったとも言われているが、ただ彼が現役時代に作っていたのは鉄観音茶ではなく、主に包種茶だったと思われる。その証拠に



張迺妙茶師紀念館を運営する第3代 張位宜氏



台北木柵 最初に鉄観音が植えられたと言われる辺り

1916年台湾勸業共進會初製包種茶品評において総督特等金牌賞を得る栄誉を与えられたが、その茶は包種茶だったのだ。

ただこの受賞茶については茶業者からクレームがあり、総督府が調査し、最終的に問題なしと判定したという逸話もある。それはこれまでの茶とは製法が違っていたから起こったことだと言われており、この点から見ても、彼が安溪から特別な製茶技術を持ち帰り、茶を製造した可能性が窺われる。

因みに歴史としてよく書かれている、『張迺妙と迺乾の兄弟が安溪から茶樹を持ち帰った』というのは誤りだという。2人は遠い親戚関係にあ



台北木柵 張協興の張丁頂氏

り、たまたま迺妙が茶樹を持ち帰る時、里帰りしてただけだったと張位宜氏は説明する。実の弟は迺省といい、台湾から更にマレーシアのペナン島に移住し、医者として暮らしていたようだ。

彼が本格的に鉄観音茶作りに励んだのは1935年の定年退職した後だった。これ以降、鉄観音茶の栽培、製法の研究を行ったが、張迺妙の茶を実際に購入したことがあるという茶商、張協興の張丁頂氏(97歳)によれば、『周辺の茶農家に製法を伝授することはなく、自分の一族の者だけに教えていた。それは当時の台湾人の発想としては至極当然のことだった』と述懐する。

ちょうどその頃の台湾日日新聞に『瑞芳四脚亭(現在の新北市)に安溪から持ち込んだ鉄観音品種を植え、その生育は順調で、優秀な茶師を招いて焙煎し、その品質は現地にも劣らない。今後島内で奨励し、名産品を目指す』という記事を発見した。ということは、その時期には総督府も鉄観音茶の優位性に目を付け、瑞芳の業者に委託して、製茶を計画していたということだ。

ただ戦争が始まり、張迺妙が鉄観音品種を植えた茶畑も食糧確保のために雑穀やイモ畑に変えられてしまったらしい。本格的な鉄観音茶生産はすぐに中断を余儀なくされたことになる。光復後彼は自ら新しい茶畑を開墾して新たに茶樹を植えた

とも聞く。当然瑞芳も同じ運命に遭い、その後復活されなかったのかもしれない。

1955年に彼が死去した頃も鉄観音茶は作られてはいたが、その産量は多くはなく、希少ゆえ価格は高かったが、メジャーな茶と言う評価は見えてこない。張丁頂氏は『1950-60年代、鉄観音茶は中南部にニーズがあり、台南、嘉義、台中、豊原などへ売っていた』という。その理由は、その頃は経済的には中南部にも力があり、金持ちは昔から鉄観音茶を飲んでいたが、それは福建省から持ち込まれたものだった。日中戦争後、中台の交流は閉ざされ、戦後は断絶した。

香港経由で秘密裏に回ってくる茶も量が少なく、その需要を木柵が満たした(当時安溪鉄観音茶は木柵鉄観音茶の10倍の価格だったとの証言もあった)というのだ。ただその後も木柵での産量が増えず(やはり鉄観音茶はその成熟した茶葉の摘採時期などが限られており、収量に限りが出る)、2代目達は、鉄観音品種を持って、南投の名間などでの栽培を試みるも気候や土壤の違いから、いいものは出来なかったという話もあった。

1980年代、李登輝市長時代に公道が開かれ、台北市からのアクセスもかなり良くなったこと、更に茶農家が直接茶葉を消費者に販売できるようになったことも手伝い、観光地化された猫空で、木柵鉄観音の名が広まっていった。その頃の台湾鉄観音茶の大きな特徴は何かと尋ねれば、多くの生産者から、やはり『高発酵と重焙煎』だという答えが返って来た。

尚現時点でも張迺妙が安溪から持ってきた茶の品種については一つの疑問を持っている。張迺妙は安溪大坪の出身であるが、鉄観音品種の発祥地は大坪ではなく、西坪である。大坪は、毛蟹の発祥地と言われているので、なぜ張が自らの故郷の茶ではなく、隣の茶を台湾に持ち込んだのが正直よく分からない。この辺を廈門の茶業関係者に聞いてみると、『100年以上前に、既に鉄観音品種



安溪西坪の茶畑

は広く普及していたので、大坪にも鉄観音があり、これを持ち帰ったのであろう』と説明されたが、張迺妙の好みは鉄観音品種だったということかと勝手に考えている。

勿論鉄観音も毛蟹も同時に持ち込んだという考えもあるだろうし、鉄観音の方が台湾で生育しやすいと考えた可能性もある。その当時鉄観音茶の産量は少なく、希少価値があったとも言われているが、台湾においてその希少性が必要だったのかも、実はよく分からない。木柵には鉄観音と並び、梅占も植えられていることから、これを持ち帰った可能性も否定できない。

ただ全く勝手な想像としては、安溪で鉄観音茶と出会った張迺妙が、1回目はその美味しさに惹かれて少量の茶苗を分けてもらい、自らが栽培して、その茶を台湾で宣伝し、2回目の買付に繋がったのではないだろうか。ところが実際鉄観音茶は主流になれず、彼自身も会社勤めの間は仕事として包種茶などを作り、退職後に好きなお茶を作った、ということではないだろうか。

## 布球揉捻の技法について

鉄観音茶の大きな特徴の一つは、茶葉が球形に丸まっていることであろう。木柵を含む日本時代の文山地区では多くは条形の包種茶であり、鉄観



安溪西坪 梅記第5代 王曼堯氏

音だけが球形なのはなぜだろうか。そして一番の疑問は、この球形茶葉の技法、布を使って茶葉を揉捻する手法はどこで発明され、どのような伝播したのかということだ。

茶業関係者多数にヒアリングしたところでは、どうも地域ごとにその謂れがあり、はっきりとはしないが、その多くが『福建省安溪からもたらされた』ものだという。そして安溪にもいくつかの話があるようだが、有力なものの一つとして、ここでは王三言の伝承を紹介してみたい。

王三言は安溪西坪南岩村の人。代々製茶業を営んでいたが、1870年代に对外开放で賑わう厦門や樟州に茶を担いで売りに行き、1875年には厦門に梅記という茶行を開設した。茶の運搬に苦勞したこと及び少し湾曲した茶葉の方が高く売れるという商売上の経験から1880年代に、これまでの伝統製法を踏まえて、茶葉を丸める方法を生み出したと言われている。

この手法は広く知られるようになり、王三言の子孫は中国のみならず、アジア各地にこの茶を持ち出して売り、富を得たようだ。1945年にシンガポールで、王三言のひ孫にあたる王聯丹が鉄観音茶『泰山峰』で一等賞を受賞したとの話もある。尚梅記は中国の国営化の時期を経て、復活。現在第5代の王曼堯氏が南岩村で、一族の伝統を守っ



安溪西坪に残る泰山楼

ている。工場の横には、王三言が建てたと言われる泰山楼が120年の時を経て、その歴史の上にしかりと建っている。

安溪で普及した布球揉捻法、当然安溪大坪に里帰りした張迺妙もその製法を目にしたと思われ、彼が安溪から木柵に持ち込んだという話には信憑性がある。前述の張協興、張丁頂氏は『子供の頃（約90年前）には、鉄観音茶は丸まっていた』という。勿論当時は手作業であり、今のような球形ではないが、蝦型から徐々に半球形になっていったとの話も出ていた。



安溪 手作業による布球揉捻

また中部の名間では早くからこの技法が伝わっていたとの話がある。高山茶の回で紹介した王福記の王泰友が茶商として各地に教えて普及させたという話もあり、また彼だけではなく、安溪出身の茶師が、光復後の混乱期に台湾にやってきて、一つの職業として名間あたり（当時中部で茶樹が多かった場所）で、製茶師をしながら教えたとも考えられる。台湾中部の茶葉が丸められた訳、そして北部で唯一鉄観音茶が丸い訳、もう少し検討が必要であろう。